

吉田精一編

日本文学鑑賞辞典

古典編

埼玉大学教授・文学博士

吉田精一 編

日本文学鑑賞辞典

古 典 編

東京堂出版

日本文学鑑賞辞典 定価 二八〇〇円

(古典編)

昭和三五年一二月一五日 初版発行
昭和五四年一月一〇日 二〇版発行

不
許
複
製

編者 吉田精一
発行者 岩出貞夫
印刷所 文殊印刷有限公司
製本所 渡辺製本株式会社

発行所 株式会社 東京堂出版

東京都千代田区神田錦町三ノ七(丁101)
電話 東京 三三一五四 振替 東京 三二七〇

1591-143109-5164

© Seichi Yoshida 1960

序 文

文芸作品は、社会的、歴史的産物として、その作られた社会や、歴史的状況を反映していることはもちろんである。われわれはそれを通じて特定の時代の、特殊な環境にあった人間の、思想や感情や、また彼らが追求していた問題を、ききとることができる。一つの作品を理解するにあたり、われわれはことに社会環境と周囲の条件とをこまかく調査することによって、その意義を正しく読みとる努力をわれわれ自身に課さねばならない。

しかしながら、文芸作品はたんなる記録や報告ではない。それが長い年月の風雪にたえて、今日の読者にもうたえる力をもっているのは、そこに時間と歴史とをこえる不滅の生命力と、不变の美しさとを内在しているからにほかならない。

一見すれば前者は、「知る」ことを中心命題とし、後者は、「味う」ことを目的とし、ともに別のみちを歩むように見える。前者が「真」をめざすならば、後者は「美」を志しているかのようである。しかしわれわれの考えるところによれば、両者は決して別のものではない。正確に「知る」ことによつて、ふかい「味い方」がうまれ、深い「味い方」を待つて、正しく「知る」ことができる。われわれの仕事の理想は、それが容易には達せられないことを承知の上で、バスカルのいわゆる「幾何学的精神」と「繊細な精神」との合致の上に置かれねばならない。

従来の文学辞典は、辞典としての客觀性を尊重するという意味もあって、重点を主として文献学的な方面に置き、深く味うという鑑賞面には粗漏であった。当然、「辞書的な」という形容詞が表現する、

平板で砂を噛むような叙述でみたされる場合が多かった。ことに国文学方面のものには、その種の傾向が強く、辞典ほど面白い読み物から遠い性格のものはなかつたのである。

本書は、この点にかんがみ、正しい文献学的な調査研究は踏まえつゝも、それを幾分裏にまわし、意義内容をいかに読み味うべきかという、鑑賞面を主眼として、新しい編纂をこころみた。「文学鑑賞辞典」と銘うつたのは、その理由からである。

このために、古典・近代の二編を通じて、日本文学史上の名作佳編ができる限り網羅し、忠実な解説に加えて、正しく深い鑑賞による価値判断と、史的意義の設定をこころみた。出来栄えについては、大方の批評を待つべきだが、作品の本質的な解明と味解という点では、在来の辞書類から数歩前進することを期したのである。

初学の人たちにとっては、日本文学鑑賞の手引き書となり、研究者や教授者にとっては参考して役立つものとなり、一般の人々にとっては、独立した興味ある読み物となるというのが、この書編集のねらいの一つでもあつたが、多少ともその目的が達せられていくとすれば、編者としてよろこびに耐えないのである。

なお、このしごとのために、中堅・新進の専門家数十名の参加をねがつたが、ことに編纂者としては、長野嘗一、竹下數馬、鈴木重三、古川清彦、野村貢次の諸氏に担当していただいた。ここに記して深い感謝の意を表する。

昭和三十五年初冬

吉田精一

凡例

△本書は、上代から近世末にいたる日本文学全般から約三〇〇の作品を選び、各作品に鑑賞を施すことを主眼とした。

△項目は、各作品を五十音順に配列して構成した。したがって、時代・形態の方から作品を検出するときは卷頭の時代・形態別項目表または巻末の作品・事項索引により、また、作家名の方からの検出には巻末の人名索引によると便利である。

△各作家の略歴は、「作者」として項目の末尾に付し、おもな経歴および主要作品などをあげるに止めた。一作家で二作品以上収載した場合、その作家の略歴は、五十音順による最初の項目の末尾に付した。たとえば、井原西鶴の場合、「好色一代男」「好色五人女」「世間胸算用」「日本水代藏」「武道伝来記」など十五作品を収めたが、その略歴は「好色一代男」の項の末尾に示してある。

△物語・戯曲などの場合は、「梗概」を設け【鑑賞】の一助とした。作品集（隨筆集・説話集・詩集・歌集・句集その他）を項目とした場合は、その中の代表的な作品をとくに取りあげて【解説】【鑑賞】を施した。集合的な戯曲作品（謡曲・狂言・歌舞伎十

八番）および歌集（万葉集など）句集（芭蕉七部集）その他（風土記など）の大項目には作品または作家の小項目を設けた。

△【解説】中の所収文献は、便宜上、入手しやすいもののみにとどめた。

用語・符号・索引

△引用文は、原則として原文のままにした。

△難読の語には、つとめてルビを付した。ルビは原文中にあったものも現代表記法に統一した。

△作品名・書名には、すべて「」をつけた。

△本文中に*印のある作品名は独立項目として収録されていることを示す。

△歌集・句集中の引用は、△△で示した。代表作品をとくに解説・鑑賞するときはこれを別行に示し、

△△は省いた。

△索引は、「人名索引」と「作品・事項索引」とに分けた。

執筆者・編集者

△各項目の執筆は、それぞれ専門家に委嘱し、各項目の末尾にその姓名を明記した。

△編集は、吉田精一が責任者となり、委員として鈴木重三・竹下数馬・長野寛一・野村貴次・古川清彦の五名が参加した。

凡　　例

1. 本索引では、見出し項目および文中の人名・書名・作品名・事項の、おもなものを五十音順に配列した。
2. ページの太字は、項目として採録した作品、または〔作者〕略歴をつけた項目を示す。
3. 〔作者〕略歴の中の人名・書名・作品名・事項は摘出していない。
4. 人名については、原則として姓名を探ったが、俳人などは姓を省いた。例外として姓および名の両方で示したものもある。(例——西鶴、井原西鶴。)

懷風藻..... 110

時代・形態別項目表 [目次]

中古

○日記・紀行・隨筆	土佐日記..... 100
晴蛉日記	和泉式部日記..... 100
更級日記	紫式部日記..... 100
讀岐典侍日記	大曾 三三
	三七

宣命..... 三六

○物語	伊勢物語..... 三〇
	竹取物語..... 三一
	宇津保物語..... 三二
	大和物語..... 三三
	志宅落葉物語..... 三四

○和歌	古今和歌集..... 三五
	紀貫之..... 三六
	凡河内躬恒..... 三七
	小野小町..... 三八
	後撰和歌集..... 三九

上代

○和歌・歌謡	萬葉集..... 一三
	記紀歌謡..... 一四
	足跡歌..... 一五
	東歌..... 一六
	大伴旅人..... 一七

○説話

○説話	出雲風土記..... 二〇
	常陸風土記..... 二一
	播磨風土記..... 二二
	肥前風土記..... 二三
	豊後風土記..... 二四
	逸文風土記..... 二五
	日本書紀..... 二六

○漢詩文	日本書紀..... 二六
	日本漢記..... 二七
	祝詞..... 二八
	誓..... 二九
○歴史物語	大鏡..... 二九
	今鏡..... 三〇
	朱花物語..... 三一
	千載和歌集..... 三二

時代・形態別項目表

中世

藤原俊成	和泉式部集	古事記	十訓抄
曾丹集	散木奇歌集	撰集抄	古今著聞集
新撰万葉集	歌合	沙石集	物皇記
成尋阿闍梨母集	西行	松浦宮物語	唐物語
新撰万葉集	東遊	住吉物語	宝物集
催馬樂	梁塵秘抄	石清水物語	発心集
梁塵秘抄	苔の衣	苔の衣	沙石集
○漢詩集	秋夜長物語	吉野拾遺	唐糸草紙
經國集	建春門院中納言日記	梅松論	福富草子
菅家文草	十六夜日記	増鏡	文正草子
本朝文粹	弁内侍日記	融	猿源氏草子
無名草子	海道記	自然居士	鉢かつき
方丈記	東閣紀行	忠度	物臭太郎
徒然草	明月記	井筒	一寸法師
○宗教文學	源平衰衰記	隅田川	三人法師
往生要集	太平記	安宅	狂言
三宝経詞	義経記	船弁慶	花伝書
○説話	保元物語	申楽談義	申樂談義
宇治拾遺物語	平治物語	六輪一露	六輪一露
○お伽草子	平家物語	狂言	狂言
忍音物語	源平衰衰記	末広がり	末広がり
忍音物語	太平記	子	子

時代・形態別項目表

○連歌	舞の本.....益
新古今和歌集.....毛	○和歌
後鳥羽院.....毛	新古今和歌集.....毛
藤原定家.....毛	後鳥羽院.....毛
藤原家隆.....毛	藤原定家.....毛
藤原良経.....毛	藤原家隆.....毛
式子内親王.....毛	藤原良経.....毛
俊成女.....毛	式子内親王.....毛
玉葉和歌集.....毛	俊成女.....毛
風雅和歌集.....毛	玉葉和歌集.....毛
風葉和歌集.....毛	風雅和歌集.....毛
新葉和歌集.....毛	風葉和歌集.....毛
近代秀歌.....公	新葉和歌集.....毛
秋篠月清集.....三	近代秀歌.....公
金槐和歌集.....六	秋篠月清集.....三
草庵集.....毛	金槐和歌集.....六
草根集.....毛	草庵集.....毛
建礼門院右京大夫集.....三	草根集.....毛
小倉百人一首.....九	建礼門院右京大夫集.....三
夫木和歌抄.....毛	小倉百人一首.....九
正徹物語.....三五	夫木和歌抄.....毛
伊曾保物語.....三五	正徹物語.....三五
可笑記.....三〇	伊曾保物語.....三五
○仮名草子	近世
恨の介.....七	○歌謡
薄雪物語.....七	閑吟集.....一
浮世物語.....七	歎異抄.....四二
けいせい色三味線.....三〇	正法眼藏.....五六
好色敗毒散.....三〇	○宗教文学
○黄表紙	○讀本
英草紙.....五五	○讀本
西山物語.....五五	英草紙.....五五
本朝水滸伝.....五五	西山物語.....五五
雨月物語.....五五	本朝水滸伝.....五五
春雨物語.....五五	雨月物語.....五五
昔話稻妻表紙.....六七	春雨物語.....五五
椿説弓張月.....六七	昔話稻妻表紙.....六七
南総里見八犬伝.....五九	椿説弓張月.....六七
しみのすみか物語.....三三	南総里見八犬伝.....五九
○洒落本	○舍巻
遊子方言.....三三	○洒落本
通言總鑑.....五六	遊子方言.....三三
世說新語茶.....四七	通言總鑑.....五六
傾城買二筋道.....二〇	世說新語茶.....四七
浮世親仁形氣.....四九	傾城買二筋道.....二〇
西鶴織留.....九	浮世親仁形氣.....四九
万の文反古.....九	西鶴織留.....九
諸説大鑑.....九	万の文反古.....九
西鶴置土産.....九	諸説大鑑.....九
金々先生栄花夢.....一公	西鶴置土産.....九
江戸生鮑氣機焼.....九	金々先生栄花夢.....一公
文武二道万石通.....六二	江戸生鮑氣機焼.....九
大悲千禄本.....四毛	文武二道万石通.....六二
大悲千禄本.....四毛	大悲千禄本.....四毛

時代・形態別項目表

○人情本	春色梅兒著美節用	二四一
○滑稽本	風流志道軒伝	五六五
咄本	道中膝藁毛	四三三
醒脾笑	浮世風呂	四三三
鹿の巻筆	浮世床	四三三
曾根崎心中	花曆八笑人	五六一
きのふはけふの物語		
丹波与作待夜の小室節		
○淨瑠璃		
国姓爺合戦		
傾城反魂香		二〇七
曾根崎心中		四三三
真途の飛脚		四五五
博多小女郎波枕		四五五
吾妻		

心中天の網島	女殺油地獄	鎖の権三重帷子	心中二つ腹帶	心中二つ腹帶
元三	二五	七一	二五	二五
菅原伝授手習鑑	義経千本桜	仮名手本忠臣蔵	双蝶蝶曲輪日記	ひらかな盛衰記
四〇七	七六	三三	三四四	三四四
一谷嫗軍記	本朝二十四孝	妹背山婦女庭訓	新版歌舞祭文	新版歌舞祭文
一〇〇	六八	五九	五九	五九
鮎容女舞衣	近頃河原達引	近頃河原達引	新歌舞祭文	新歌舞祭文
五九	五九	五九	五九	五九
神靈矢口渡	四〇五	四〇五
.....	四〇五	四〇五

傾城浅間嶺	三十石燈始	大商蛭小島	伽羅先代萩
五大力恋緘	東海道四谷怪談	浮世柄比翼稻妻	お染久松色説販
与話情浮名横櫛	萬紅葉宇都谷幹	三人吉三廟初買	青砥稿花紅彩画
薦衣紛上野初花	天衣紛上野初花	天衣紛上野初花	天衣紛上野初花
○和 歌			
拳白集	一七	一七	一七
六帖詠草	七七	七七	七七
桂園一枝	一六	一六	一六
賀茂翁歌集	一〇〇	一〇〇	一〇〇
良寛歌集	七六	七六	七六
天降言	一一	一一	一一
平賀元義歌集			
草徑集	至七	至七	至七
志渡夫廻舍歌集	四五五	四五五	四五五
海士のかる藻	一九	一九	一九

○歌謡	隆達小歌	古田
松の葉	大宮	五六
山家鳥虫歌	大宮	三五
ト養狂歌集	大宮	一四
徳和歌後万載集	大宮	四九
古今夷曲集	大宮	二〇
太平渠府	大宮	四六
四方のあか	大宮	七四
○俳諧・俳文		
新增大筑波集	三四四	
談林百十韻	三四七	
貝おはひ	二八	
芭蕉七部集	三四九	
冬の日	三四五	
春の日	三四七	
曠野	三四八	
ひそご	三四九	
猿義	三四九	
炭俵	三四九	
続猿蓑	三四九	
五元集	三四九	
天六		

時代・形態別項目表

玄峰集	一一二	駿台雑話	一一三
野ざらし紀行	一一三	常山紀談	一一三
笈の小文	一一三	胆大小心錄	一一三
更科紀行	一一五	源氏物語玉の小櫛	一一三
おくのはそ道	一一六	玉勝間	一一四
幻住庵記	一一七	東遊記	一一六
嵯峨日記	一二〇	鳩翁道話	一一七
去來抄	一八〇	折たく柴の記	一一四
三冊子	一一一	一話一言	一一五
風俗文選	一一一		
独江と	一一二		
鶴衣	一一三		
夜半樂	一一五		
新華摘	一一六		
蕪村七部集	一一九		
おらが春	一二〇		
千代尼句集	一二五		
○川柳・雜俳			
武玉川	六九		
誹風柳多留	五六		
○隨筆・その他			
難波土産	吾美		
役者論語	吾美		
花月草紙	一二五		

五十音順項目表 [目 次]

大商蛭小島	六	菅家文草	一君
おくのはそ道	九	記紀歌謡	一
小倉百人一首	九	義經記	一
お染久松色読販	一〇	きのふはけふの物語	一
落満物語	一一	鳩翁道話	一
浮世親仁形氣	一一	狂言	一
浮世柄比翼稻妻	一二	玉葉和歌集	一
おらが春の記	一二	挙白集	一
折たく柴の記	一二	去采抄	一
伽婢子	一三	金塊和歌集	一
浮世床	一三	金々先生栄花夢	一
浮世風呂	一三	近代秀歌	一
雨月物語	一三	金葉和歌集	一
宇治拾遺物語	一四	愚管抄	一
薄雪物語	一四	天衣紛上野初花	一
鶴衣合	一四	桂園一枝	一
歌合	一四	経国集	一
宇津保物語	一五	傾城浅間猿	一
恨の介	一五	けいせい色三味線	一
江戸生艶氣櫻燒	一五	傾城買二筋道	一
神楽歌	一五	傾城反魂香	一
花月草紙	一五	源氏物語	一
婿始日記	一五	源氏物語玉の小楠	一
可笑記	一五		
花伝書	一五		
仮名手本忠臣蔵	一五		
仮名文章娘節用	一五		
歌舞伎十八番	一五		
賀茂翁家集	一五		
唐物語	一五		
唐糸草紙	一五		
閑吟集	一五		
老のくりごと	一六		
老の小文	一六		
老のすさみ	一六		
往生要集	一六		
一寸法師	一七		
今鏡	一七		
妹背山婦女庭訓	一七		
石清水物語	一七		

五十音順項目表

幻住庵記	二五	志瀬夫廻舍歌集	二五
建春門院中納言日記	三七	しみのすみか物語	二五
源平盛衰記	三六	沙石集	二五
玄峰集	三一	西鶴續留	二五
建礼門院右京大夫集	三一	西鶴諸国はなし	二五
好色一代男	二五	備馬集	二五
好色一代女	二五	嵯峨日記	二五
好色五人女	二五	狹衣物語	二五
好色伝受	二五	ささめごと	二五
好色敗毒散	二五	讀岐典侍日記	二五
江談抄	二五	更科紀行	二五
古今著聞集	二九	更級日記	二七
古今和歌集	二九	申菜談義	二九
国姓爺合戦	二五	猿源氏草子	三一
苔の衣	二五	山家集	三一
五元集	二九	山家鳥虫歌	三一
古今夷曲集	二九	三十石燈始	三一
古事記	二五	三冊子	三一
古事記	二五	三人吉三廓初買	三一
鹿の巻筆	二五	三人法師	三一
散木奇歌集	二五	三宝絵詞	三一
新版歌祭文	二五	新撰萬葉集	秀一
新增大筑波集	二五	新撰大筑波集	秀一
神皇正統記	二五	新撰菟玖波集	秀一
新華摘	二五	太平樂府	二七
住吉物語	二五	太平記	二七
菅原伝授手習鑑	四〇七	他我身の上	二七
後拾遺和歌集	二九	竹取物語	二七
御前義経記	二五	玉勝間	二七
後撰和歌集	二五	歎異抄	二七
五大力恋絆	二五	胆大小心錄	二七
古本説話集	二五	丹波与作待夜の小室節	二七
今昔物語集	二五	談林一百韵	二七

五十音順項目表

近頃河原達引	四九	西山物語	三三
竹齋	四六	修紫田舎源氏	二七
竹林抄	五六	日本永代藏	三一
千代尼句集	四五	二人比丘尼	三四
椿説弓張月	四七	日本書紀	三六
通言總筆	四五	日本靈異記	三九
菟玖波集	四三	野ざらし紀行	三三
萬紅葉字都谷轉	四七	祝詞	三三
堤中納言物語	四九	詠歌之連歌独吟千句	三三
徒然草	四六	梅松論	三三
東海道名所記	四八	俳風柳多留	三三
東海道四谷怪談	四九	芭蕉七部集	三三
東闕紀行	四五	博多小女郎波枕	三四
道中膝栗毛	四五	鉢かづき	三三
東遊記	四六	艶容女舞衣	三三
徳和歌後万載集	四九	花曆八笑人	三三
土佐日記	五〇	ぬく本	三三
とりかへばや物語	五一	英草紙	三三
梨本集	五三	浜松中納言物語	三三
難波土産	五六	春雨物語	三三
男色大鑑	五九	ひとりごと	五三
南總里見八大伝	五九	ひらかな盛衰記	五三
修紫田舎源氏	二七	トモ狂歌集	六三
日本永代藏	三一	発心集	六三
二人比丘尼	三四	本朝水滸伝	六三
日本書紀	三六	本朝廿四孝	六三
日本靈異記	三九	本朝文粹	六三
野ざらし紀行	三三	福富草子	五七
祝詞	三三	武家義理物語	五五
詠歌之連歌独吟千句	三三	藤村七部集	五五
梅松論	三三	双蝶蝶曲輪日記	五五
俳風柳多留	三三	仏足跡歌	五七
芭蕉七部集	三三	武道伝来記	五九
博多小女郎波枕	三四	風土記	六〇
鉢かづき	三三	夫木和歌抄	六〇
艶容女舞衣	三三	文正草子	六〇
花曆八笑人	三三	文武二道万石通	六一
ぬく本	三三	水無瀬三吟	六一
英草紙	三三	昔話福妻表紙	六一
浜松中納言物語	三三	武玉川	六一
春雨物語	三三	無名草子	六一
ひとりごと	五三	紫式部日記	六一
ひらかな盛衰記	五三	眞途の飛脚	六一
トモ狂歌集	六三	伽羅先代萩	六一
発心集	六三	明月記	六一
本朝水滸伝	六三	月夜記	六一
本朝廿四孝	六三	月夜記	六一
本朝文粹	六三	月夜記	六一
福富草子	五七	月夜記	六一
武家義理物語	五五	月夜記	六一
藤村七部集	五五	月夜記	六一
双蝶蝶曲輪日記	五五	月夜記	六一
仏足跡歌	五七	月夜記	六一
武道伝来記	五九	月夜記	六一
風土記	六〇	月夜記	六一
夫木和歌抄	六〇	月夜記	六一
文正草子	六〇	月夜記	六一
文武二道万石通	六一	月夜記	六一
水無瀬三吟	六一	月夜記	六一
昔話福妻表紙	六一	月夜記	六一
武玉川	六一	月夜記	六一
無名草子	六一	月夜記	六一
紫式部日記	六一	月夜記	六一
眞途の飛脚	六一	月夜記	六一
伽羅先代萩	六一	月夜記	六一
明月記	六一	月夜記	六一

五十音順項目表

役者論語	古今
夜半樂	古今
大和物語	古今
鍵の権三重帷子	古今
遊子方言	古今
謡曲	七六
義經千本桜	七六
吉野拾遺	七三
四方のあか	七三
万の文反古	七三
与話情浮名横櫛	七三
夜半の寝覚	七四
隆達小歌	七四
良寛歌集	七四
梁塵秘抄	七四
六帖詠草	七五
六輪一露	七五
和漢朗詠集	七七

青砥稿花紅彩画

あおとぞう 歌舞伎脚本 世話物 五

幕八場

河竹黙阿弥（當時二世河竹新七）

あ

【解説】文久二年（一八六二）三月の市村座において初演された黙阿弥初期の代表作の一と目される。江戸末期において全盛を誇った、いわゆる白浪狂言（盜賊を主人公とした劇）の系列に属し、「三人吉三」と並んで、現在も繰り返し上演される。黙阿弥はこの作を、亀戸豊國の画いた当時の人気俳優の五人男の見立錦絵からヒントを受け、在来の白浪物中、日本駄右衛門その他の人名を借りて、通し狂言として書いた。これらの盜賊は、終幕に至つて青砥左衛門藤綱の手によって捕縛されるが、これは馬琴の『青砥藤綱模稟案』以来名奉行として人口に膾炙した青砥藤綱を登場せしめたもので、三世桜田治助にも、模稟案の翻案脚色『青砥稿』がある。本作の別名題としては、『弁天娘女男白浪』『江島育児生兎菊』『音菊弁天小僧』などがあるが、いずれも主人公である弁天小僧によつた名称で、後のはつは初演以来五世尾上菊五郎の当り役で、その後も音羽屋の家の芸とされたところから、菊の字を織り込んで組ま

れた名題である。

『黙阿弥全集四』『岩波文庫』

【梗概】序幕は長谷觀音の花見の場である。小山家の息女千寿姫は長谷寺の花見に許嫁の信田の小太郎と行き会つて、思いのたけを語るうちに、お家の重宝胡蝶の香合を渡して、小太郎の仮住居へ同行することになる。この小太郎なるものが、実は弁天小僧が重宝を奪うために化けていることを、千寿姫は知らない。一方御主君信田の左衛門の後室を伴つて、お家の再興をはかる赤星頼母は、甥の十三郎に主の命を救うため百両の金を調達するよう頼む。十三郎は思い余つて、千寿姫が宝前で供えた回向料の百両を盗むが、たちまち小山の家来に見つけられ、奪い返される。これを行き交うた色奴の沼田幸蔵（実は忠信利平）がまた奪い取り、それに目をつけた信田小太郎の仲間（実は南郷力丸）がさらになおうとするのを、結局忠信に持つて行かれれる。話変わって、千寿姫を連れた信田の小太郎は人気のない神奥ヶ岳の辻堂で化の皮をあらわすので、愕然として千寿姫は谷へ身を投げる。と辻堂の中から修驗者風の日本駄右衛門が現われ、見とがめられた弁天小僧は結局駄右衛門の手下になる。一方、せっかく手に入れた百両を奪われた十三郎が申しわけに死のうとするのを、忠信は止める。二人はかつての主従であることがわかり、忠信は百両を十三郎に返し、十三郎は駄右衛門の一味に加わり、盜賊となつて、お家再興の金をつくることになる。ここへ南郷と弁天が現